

御曹司だからと容赦しません!?

あかし瑞穂

Mizubo Akashi



目次

御曹司だからと容赦しません!?

愛しい彼女だからと容赦しません!?

書き下ろし番外編

『最愛のひとだからと容赦しません!?

御曹司だからと容赦しません!?

プロローグ あなたは一体誰？

——あんなの、大したことない。

——何言ってるのよ！ あのデザインの素晴らしさがわからないの!? 斜面を生かした半地下の寝室も、全面ガラス張りで海が見渡せる広いリビングも、斬新なのにとっても落ち着ける雰囲気で、素敵だったわ！ あんなデザインができるなんて、素晴らしい才能よ！

——あんなに素敵な作品を生み出したのだから、素敵な恋だったに違いないでしょ！ そりや叶わなかつたのかもしれないけど、それでもこんなに人を感動させる力があるんだから！

——世界中の誰もが否定しても、私が肯定するわよ！ あなたの恋は素晴らしかつたつて！

……そう言つた時。その人はなんて答えたのだろう——

ほんやりとした記憶の中、熱くて滑らかなものに包まれて、どきどきして、気持ち良くて……痛かった、気がした。

「……ん……」

「かすかに水音が聞こえる。ぼうつとしながら重いまぶたを開けると、見覚えのない白い天井が目に入つてきた。

「え……？ ここど……つ!?」

起き上がりうとした途端、鈍い痛みが身体の奥に走る。え、どうして？ と思いつつ上掛けをめくると——

「っ！————！」

(はつ、ははははは裸つ!?)

何も着ていない。しかも、胸の膨らみや太腿に赤い痕ふとももが付いている。下腹部が重あだるくて、鈍く痛い。

(これつて！ これつて！ まさかっ!?)

さあああと血の気が引く。どう見ても……事後だ。

(つ！ シャワーの音!?)

慌てて辺りを見回すと、ここは大きなダブルベッドがある室内で、音は白いドアの向こうから聞こえてきているようだ。床には、あちらこちらに洋服が散らばっている。自分が着ていたリクルートスーツに交ざった……男物のスラックス。

(あああああああ！)

——その時の私の頭には、「とにかく逃げよう！」としか思い浮かばなかつた。大急ぎで服をかき集めて身に着け、服と同じく床に転がつていた肩掛けバッグを拾つて、誰かがシャワーを止める前に部屋から飛び出した。

綺麗なホテルのロビーから最寄りの駅まで、全速力で走り抜けた。改札口の前でよう

やく立ち止まり、はあはあと荒い息を吐く。

「一体……何があつたの？？？？」

何も、覚えてない。でも、肌に残つた痕と身体の痛みからして、絶対……ヤツテシマツタ、と思う。

(誰と？！ だつて、昨日は！)

住宅会社数社が合同で企画した、由緒ある住宅デザイン賞の結果発表日。学生でも応

募できたから、何度も練り直したデザインを持ち込み、どきどきしながら発表を待つた。発表会場であるホテルの大広間は立ち見する人で溢れていて、小柄な私は前がよく見えなかつた。なので、広間のすぐ隣の会議室でも授賞式の映像が見られると聞き、そちらに移動して確認したのだ。会議室のモニターに映された大賞作品は——私のものではなかつた。

——でも、その作品は、本当に素晴らしい……一目で惚れ込んでしまつた。チーム名で呼ばれて前に出た受賞者は背の高い男の人だつたけど、その瞬間モニターがおかしくなり、映像が乱れてよく見えなくなつた。直接見ようと大広間に移動したけれど、やつぱり満員の人でなかなか会場に入れず、そうこうしているうちに授賞式は終わつてしまい、結局彼が誰だつたのかはわからないまさ。

その後開かれた交流会で会えるかも、と参加して、見たことない洋酒を飲んでみたら意外に美味しいくて、つい飲みすぎてしまつて——

「……以後、記憶がない……」

「あああああ

「何も思い出せない。誰かと言い合っていたような記憶の欠片しか、自分の中には残つていいない。

「初めてだつていうのに……覚えてないなんて……」

酔つ払つて初体験して、しかも忘れるなんて、サイアク。こんなの、誰にも言えるわけない。

「とにかく……産婦人科に行かないと」

鈍い痛みはあるけれど、身体の状態からすると、ちゃんと避妊はしてくれていた……と思う。だけど、念のため受診した方がいいよね。

はあああ、と重い溜息をついた私は、スマホで病院を検索した後、これまた重い身体を引き摺つて、改札口の中に入つていつたのだった。

1 御曹司だからと、容赦しません！

「……今回は穂高のデザインで行こう。緩やかな曲線メインのフォルムが、クライアントもお気に召したようだ。社長以下、役員の評判も非常に良かったぞ」

「ありがとうございます、竹田課長」

（また！ 負けた……つ！）

人知れず拳を握り締めた私、三森香苗の目の前で、爽やかな笑顔と共に課長と向き合う男。

身長百五十三センチの私より、余裕で頭一つ分以上背が高いヤツは、茶髪がかつた明るい髪に、少し栗色の混ざった不思議な瞳をしていて、鼻筋高く整つた顔付きはまるで王子様のようだと社内で評判だ。肩幅も広く、ライトグレーのスーツを着ていても鍛えられた身体がわかる。こちらからは顔が見えないけれど、きっと自慢げな表情をしているに違いない——！

（あいつの背中が私の熱視線で、焦げ焦げに焦げたらいいのにつ……！）

「また穂高だつたわねえ。残念ね、香苗」

「冬子」

後ろを振り向くと、ひよいと穂高の方に顔を向ける九条冬子がいた。私より背が高い彼女は艶やかでストレートな黒髪のスレンダー美人で、『モデルの方が向いているんじゃないかな』なんて言われていたりする。今もソフトデニムのパンツを、格好良く着こなしていた。

「しつかし、香苗つて懲りないわよねえ。いい加減、穂高に突つかかるの、やめたら？」

「なんですよ？」

冬子が横目で穂高を見る。私も釣られて、まだ課長と話している彼を見た。

HODAKA DESIGN COMPANYは、個人住宅を始め、学校や公園などの公共施設、高層ビルのデザインも手がける一流デザイン会社だ。ここ十年は建築以外の分野にも幅を広げている、成長企業の一つ。社長の穂高実は、アジアスポーツ大会が日本で開催された時、メイン会場となつた陸上競技場をデザインして有名になつた。

……そして穂高優は、私の同期にして社長令息。そう、御曹司つてやつだ。身に着けている時計も靴も高そうだし、スーツだってオーダーメイドだろうし、背が高くて顔が良くて金持ちで……と来た上に、デザイナーとしての才能まで持つていて。もの凄く、贊美だけど、ヤツの才能は本物だ。本当に贊美だけど。

（まだ一度も勝てないなんてつ）

今回の案件は、古くなつた体育館のリノベーション。今のところ個人住宅しか手がけていない私だけど、思い切つて社内コンペに参加してみた。そうしたら、何故だか穂高まで参加してきて……結果はご覧の通りだ。

課長と話し終わつた穂高がこちらを見た。ふつと口元を歪めて笑うその顔が、非常に小憎たらしい。

「残念だつたな、三森。まためげずに参加すればいい」

穂高の視線が私の頭のてっぺんから、足元まで移動する。どうせ私が着てているのは、量販店の桜色セーラーに、これまた量販店の白いパンツだよ。わざわざ目の前に立つて、じろじろ見なくてもいいじゃない。私はジト目で彼を見上げる。愛想笑いなんて、してやらないから。

「今度こそ、あんたに勝つてやるんだから！ 首洗つて待つてなさい、穂高！」

「ああ、楽しみにしてる」

私に向けたにやりとした笑みが、冬子に視線を移した途端、にっこりに変わる。

「九条さんの試みも面白いよね。車関連のデザインはうちも手がけたことがないし、いい経験になると思う」

冬子もにっこりと上品な笑みを返す。

「ありがとうございます、穂高くん。すぐ売上に結びつかない企画を通しててくれた社長に感謝してるわ……あなたにもね」

車大好きで、真っ赤なスポーツカーを乗り回す冬子は、自動車メーカーとコラボして『車内をラグジュアリーな空間に』『いつまでも乗つていたくなる快適な空間』という案件を始めたばかりだ。初の試みだから予算枠は少ないけれど、社長は可能性を認めてくれた——らしい。

(この企画を聞いた時、凄く面白いって思つて、冬子とあーだこーだ詰めてたら、穂高が)

……そう。社長にこの企画を紹介してくれたのは、目の前にいるこの男。あつという間に社長や専務（穂高の叔父だ）も巻き込んで、冬子のアイデアを実現可能な案件にまで引っ張り上げたのだ。

こういう時、穂高との格差を感じる。私には、『こうしたら?』ぐらいの案出しや資料作成の手伝いしかできない。でも穂高は、それ以上のことができる。

「三森」

「ふざやつ!?

むにつと頬を引っ張られた私は、思わず変な声を出す。「猫みたいだな、お前」と言つた穂高が、人差し指で私の目の下を擦る。

「目の下の隈。また残業してんんだろ。肌の張りもないし、とつとつ帰つて寝た方がいいんじゃないか? 成長しないぞ」

大きな手をぱつと右手で払い、思い切り背伸びして彼の顔に顔を近づける。

「お・お・き・な・お・せ・わ。大体、もう成長期は過ぎてるわよつ、入社五年目の中堅どころなんだから」

彫りの深い、俳優のような美貌の穂高に、肌ツヤのことを指摘されても、嫌みにしか聞こえない。しかも、私のことチビだつて遠回しに言つてるし!

ふん、と鼻息を荒くした私を見下ろす穂高の目が、すつと細くなる。

「……つたく、いつまで絆つても」

ぼそつと穂高が呟いた声は、よく聞こえなかつた。眉を顰めた穂高はほんと私の頭の上に右手を置いたかと思うと、そのままくしやりと髪を乱した。「俺のライバルだつて言うなら、体調管理も怠るな。ヘロヘロのお前に勝つたつて、なんの意味もない」

じゃ、と踵を返したヤツは、さつさとその場を去つていく。乱れた髪を「もう!」と文句を言いながら直していた私は、冬子が意味深に私と穂高を見て「本当、あんた達つて厄介よねえ……」とこぼしていたことなんて、気が付いていなかつた。

——艶のある黒髪の、丸みを帯びたボブカット。オン眉の前髪に、丸い目。高くも低くもない鼻に、血行のいい唇。
(……うん、普通)

化粧室の鏡に映る自分の姿は、本当に『普通』だった。穂高に触られた辺りの肌を触つてみると、やつぱりちょっと……潤いが足りない気がした。
 (でも目の下の隈つて、そんなに目立たないじゃない。穂高つて気が付きすぎなんじやないの!?)

残業して疲れたなーと思つていると、何故か穂高のチェックが入るのだ。自分だつて残業するくせに、あの涼しげな外見が崩れることはなかつた。悔しい。

「冬子には親切で優しい貴公子面してゐるくせに」

さつきだつて、私に向けた顔と冬子に向けた顔、全然違つたわよね。なんなの、あの憎たらしい笑い方は。

(大体、穂高つて初めつから、私には感じ悪かつたわ)

……憧れのこのデザイン会社に就職できて、意気揚々と入社式に参加した私は、そこで穂高と出会つた。

「あの頃から穂高つてイケメンだつたよね……黙つていれば」
 社長の挨拶を最後に入社式が終わると、座つてゐた新入社員それぞれが席を立ち、あちらこちらで会話の花が咲く。皆やる気溢れる表情を浮かべる中、涼しげな笑みが妙に目立つ男がいた。

すらりと背の高い彼は、特に女性からの注目を浴びていた。明るいグレーのビジネススーツを着てそこに立つてゐるだけなのに、他の同期達とは何かが違うのだ。集団の中心になりながらも、さり気なく周囲に会話を振つてゐる。目をハートマークにした同期女子が、わらわらと集まつていた。
 (あんな人、この世に存在するんだ……イメージモデルにして部屋のデザインしてみたいかも)

五メートルほど離れた位置で、横顔や肩から腕のラインをほうほうと観察してみたと、彼の視線がぶつかる。

——その途端。すつと彼の顔から表情が抜け落ちた。私を見る瞳がぎらりと光る。
 (えつ?)

なんだらうと首を傾げると、見る見るうちに彼の眼が三角に吊り上がりしていく。さつきまでの笑顔はどこへやら、薄い唇がぎゅっと結ばれてゐる。

(何、あの男!?) なんで私のこと、睨んでるの!? 会つたことないんだけど!?)

なんなの、私が親の敵みたいな表情してつ!?

むつときた私も睨み返すと、バチバチと火花が散る音が聞こえた気がした。

『ねえ、あの人と知り合い?』

彼の隣にいた女性が話しかけると、男は瞬きをして——元のにこやかな顔に戻る。

『知り合いに似てたんだ。別人だつたよ』

ふいと私に背を向けた彼に、何故かカチンときた私も、ふんと鼻息荒く踵を返して立ち去つたのだった。

「……で、まさか同じ部署に配属になるなんて、思つてなかつたよね……」

デザイン部は、建築衣装、化粧品パッケージなどの雑貨類、とデザインする対象物によつて部署が分かれているけど、主力は元々社長が手がけていた建築だ。私は希望通り、建築デザイン課に配属されて——同じ課にヤツがいた。

『げ』

目が合つた瞬間、思わずそう呟いた私を見る彼の目は、もう普通だつた。視線を逸らして、無表情のまま。

何者なのよと思つていたら、皆の前での自己紹介で彼はこう言つたのだ。

『穂高優です。インターンでこちらにお邪魔してしましたが、これからは社員としてよろしくお願ひいたします』

(穂高!?)

思わず隣に立つ穂高を見上げた。課の人達も親しげに彼に話しかけている。そう言われてよくよく彼の顔を見てみると、皺を取つた社長の顔つてこんな感じになりそつだと

たのか。

(社長の息子……つまり御曹司!?)

道理でちよつとした手の仕草とか、何か違つと思つていた。セレブオーラのせいだつたのか。

(だつたら、尚更なんであんなに睨まれないといけないのよ。御曹司なんかと知り合つたのかな、庶民の私にはなかつたのに)

むむつと考へ込む私の眉間に、とんと人差し指が突き刺さつた。

『そんな皺寄せてたら、すぐ老けるぞ』

『ふけつ……ちよつと何……つ、と』

いけないいけない。次は私の自己紹介だ。こんなヤツに足を引つ張られてたまるもんですか!

きつと一瞬穂高を見つめ、私は、課中の注目を浴びながら、につこりと笑つて『三森香苗です。よろしくお願ひいたします』と綺麗にお辞儀を決めたのだった。

それから五年。冬子に言わせると、私と穂高がやり合つのは、社内の風物詩になつてゐるらしい。そんなの知らないわよ、向こうがちよつかい出してくるんだから! 私は正々堂々勝負を挑んでいるだけで、あえて近付こうとなんてしてないし!

(穂高目当ての女子達に、色々言われたこともあつたなあ)

穂高と話す機会が何故が多い私は、嫉妬めいた悪口なんかもよく言われた。特に受付のお姉さん、あからさまな穂高狙いで色々言つてたんだけど――そういえば、最近見かけなくなつたよね、彼女。他にも色々と言う人がいたけど、最近はぱつたりいなくなつた。

「喧嘩(けんか)が多すぎて、これは違うつて認めてもらつたのかも?」

鬱陶(うつとう)しかつたので、これはこれで良しとしよう。ぱんと両手で両頬を叩き、気合を入れ直した私は、負けるもんかと闘志を燃やしつつ、洗面所を後にした。そしてその後――課長から呼ばれたのだ。

「三森、穂高と組んでコンペに出ないか?」

――と。

「え、穂高と組むつて……どういうことですか?」

MAX六人の小会議室。穂高と並んで長机についている私。その机を挟んで座つた竹

田課長が、ほれとバインダークリップで挟んだ資料をそれぞれに渡してきた。

「これ……」

資料を読み進めていくうちに、思わずごくりと唾を呑んでいた。今まで手がけたことのない公共事業。駅前の、古くなつたビルや商店街の再開発案件だ。

「あの付近一帯にあるビルには、元々大手スーパーが入つていたんだ。だが、そのスーパーが事業不振で撤退してからはテナントも入らず、ほぼ空(あ)き状態。人が入らない建物は傷みも早い。耐震性が問題になり、市議会でビルは撤去、再開発が認可された」

「……新聞に載つていましたね。市で久々の大型案件だと」

資料を見る穂高の横顔は、至つて冷静だ。

「建築会社はすでに入札で決まつているが、建物を含めた駅ロータリー周辺のデザインは別のコンペとなつた。どうやら市民投票も実施するらしい。うちも何案かは出す予定だが」

「その一つを俺と三森で担当するということでしょうか?」

(あんたとペアだなんて、真つ平ゴメンよつ!)

咄嗟に口を開きかけた私だつたけれど――右隣で穂高がじつと見てゐる資料のペー
ジが目に入った。

それは、今回取り壊しが決まつてゐるビル付近の写真。薄ら汚れた灰色のコンクリー

トが年季を感じさせる。そのビルの谷間に小さな店が軒を並べる横丁があるようだけど、そちらもシャッターが下りていたり、テナント募集中のポスターが入り口に貼られていたりする店が多い。

(ここを甦らせて、もう一度人が集う場所にする……)

個人住宅だけでなく、もっと大きな建築を手がけたいと思っていた私にとつて、これはチャンスだ。ペアの相手が穂高だということは最高に気に入らないけど、仕事自体はやりがいがありそう、ううん、きっとある。だけど穂高だし、喧嘩ばかりになるんじゃ。

「で？」三森はどうする？俺はこの案件を手がけたい」

考え込んでいた私は、穂高の声で我に返る。きっと睨み付けると、彼はふつと自信ありげに口元を緩めた。

「自信がないのか？まあ、三森は大型案件のデザインなんて、まだ関わったことがないからな」

(自信がない！？)

カチンときた私は、思わず叫んでいた。

「何言つてるのよ！私もやるに決まってるでしょうが！」

途端、穂高の笑みが深くなる。すっと竹田課長の方を向いた穂高は、更に笑みを深め

てこう言った。

「課長、三森もこの通り、やる気ですので。この案件は俺達一人に任せてくれださい」

「おお、そうか！」

私の声は課長の声に重なり消えてしまう。

「いや～お前達、能力的に良いペアになると思つていたんだが、いかんせん喧嘩も多かったからなかなか勧められなくてなあ。互いの長所を生かして頑張ってほしい」

嬉しそうな竹田課長を前に――私にできたことは、ただ一つ。

「はい」

「……はい」

穂高の声にワンテンポ遅れて同意することだけだった。

＊＊＊

Tシャツにデニムパンツと、まるでお揃いの格好だった。

天気も良く、この時間帯は暑くも寒くもない、ちょうどいい気温。だけど、なんだかもやつとする。

「凄いじゃない、香苗！ 前から住宅以外のデザインもやりたいって言つてたものね。頑張りなさいよ！」

コンペに出ることにした、と冬子に言うと、彼女は私の肩をバンバン叩きながら笑つた。

「うん、アリガトウ」

答える私の声はビミョーで、冬子は眉を顰めて私を見た。

「……なんで、そんなにテンション低いの？ ……もしかして、原因は穂高？」

「……ううつ……穂高のこつちを馬鹿にしたみたいな笑みを見る度に殴りたくなるの、もう三日も我慢してるので……！」

課長との会議後『ちょっと話がある』と穂高に腕を掴まれ、連れていかれたのは資料室。

『これとあれと……それからこれ』

ドサドサドサつと分厚いファイルが私の手に積まれた。

『お、もつ……』

『今回と類似した過去案件の資料だ。今週は今の仕事の調整、来週から作業を開始するから、それまでに確認しておけよ』

『じゃ、と右手を軽く挙げた穂高は、私に背を向けて歩き出した。

『ちょっと、穂高！』

私が思わず声を上げると、振り返った彼はふん、と鼻で嗤つた。

『これくらい、三森なら読みこなせるだろ？ 曲がりなりにも、俺のライバルを名乗るなら』

『当つたり前じゃない！ これくらいどーつてことないわよっ！』

カチンときて、ついつい言い返してしまった私を見る穂高の目は……絶対笑つてた。

『お前と組むの、楽しみにしてる。失望させるなよ、ライバルさん？』

そう言つたヤツの顔は……それはそれは良い笑顔だつた……

「香苗、あんたねえ……どうしてそう毎度毎度、穂高の手のひらの上で転がされてるのよ」

『だつて腹立つのよ、あいつはああああっ！』

がつがつとおにぎりを食べる私の左隣で、深い溜息の音が聞こえる。

「で？ 穂高に渡された資料、確認したの？」

「むぎゅむぎゅ、と囁みしめた後で、私はむすつと言った。

「したわよ。……凄く参考になった」

過去、うちが請け負った類似事例がわんさか載つていた。CADが主流になる前の、手書きの設計図とか、凄く綺麗な線で描かれていて、思わず見惚れてしまつた。この三日間、暇さえあれば資料を確認していたのだ。

（穂高は嫌みつたらしいけど、仕事上で私のこと、馬鹿にしたりはしない。対等に扱つてくれてる……のはわかってるんだけど）

こういう時に、穂高との差を感じてしまう。関連資料がどこに保存されているのか、さつと出てくることは……あの部屋の資料を読み込んで覚えているつてことだ。

……そりゃあ、穂高が努力してない、なんて思つてはいないけれど。

「こうも負けが続くと、あのすまし顔をぎやふんと言わせたくなるのよつ」

ふるふると右拳を震わせる私に、何故か生ぬるい視線が向けられる。

「穂高も無駄な努力を……よりによりによつて、香苗だもんねえ……わかるわけないじやない」

冬子の声は小さくて聞き取れなかつた。

「まあ、頑張りなさいよ。ペアを組んでも穂高の鼻を明かすことはできるでしょ」

「そう、よね！？ そうだよね！」

そう、一緒にいれば腹が立つことも多いけど、参考になることも多いのだ。ここで穂高の技を盗んで、もつと成長して、絶対あつと言わせて、認めさせてやるつ……！

「よし、やるぞ！」

「えいえいオー！」と拳を天に向かつて突き出した私の隣で、冬子はもぐもぐと静かに食事を続けていたのだつた……

「おい三森、外出するぞ」

ランチ後、自席で資料とにらめっこしていた私は、穂高からほいっと白いジャケットとショルダーバッグを渡された。「え？」と首を傾げると、カーキ色のトレーナーとコートを着て黒のビジネスバッグを左手に持つた穂高が、ついと壁掛け時計の方を向いた。

「今から行けば日没前に着く。現場、どんな場所か直接確認したいだろ？」

「！」

思わず穂高の顔を仰ぎ見る。時計の針は午後四時を過ぎたところ。現場までは大体一時間ぐらいかかるから、建物の形を見るのなら今出た方がいい。

「じゃ、行くぞ」

くるりと踵を返した穂高に、私は慌てて立ち上がる。廊下を大股で歩く彼の後を、ちょこまかちょこまかと追いかける私。

「ちよい、ストップ！ 用意させてよ、穂高！」

「……」

ちらと私を見下ろした穂高が足を止める。やや荒くなつた息を整えながら、私はジヤケットを着て、首にかけていた社員証を外しバッグに仕舞つた。

「つたく、そんなに焦らなくともいいじゃない。課長に話す暇もなかつたわ」

「ふうと頬を膨らませると、瞬きをした穂高がつと目を逸らした。

「俺が話しておいたから、大丈夫だ。それに」

——早く現場を見に行きたかった……

(……え？)

穂高の口が僅かに動く。なんて言つたのか、はつきり聞き取れなかつたけど。まさか。

(お前と……つて言つてた？)

穂高が？ あのいつも私に絡んでは嫌みを言つてくる穂高が？ 私よりもずっと前を歩いていて、いつかあの大きな背中を追い越してやると思つて、私のライバルが？

（気のせい……だよね？）

ちらと穂高の顔を見ると、もうしぐれとした表情になつてる。うん、気のせいだつた。

「さあ、行くぞ。今からだと直帰になると課長にも言つてあるから、ゆっくり確認できる」

（わかつたわよ）

穂高と私の身長差は、頭一つ分ほど。並んで歩くと、思わず背伸びしたくなるのは何故だろう。

エレベーターで一階ロビーに下りる。ガラス張りのロビーは吹き抜けになつていて、明るい陽の光が射し込んでいる。私達とすれ違ひざまに、何人かの女性社員が穂高へにこやかに挨拶をした。

（行つてらっしゃい、穂高さん）

（ああ、ありがとう）

……右隣にいる私も一応会釈はされるが、どう見ても穂高のおまけ扱いだ。まあ、社長令息で天才デザイナーと名高い穂高と、同期社員だつていうだけの私とじや、扱いが変わるもの無理はないけれど。

穂高だって、凄くキラキラした笑顔を振りまいてない？ 私の時とえらく態度が違う

「穂高って、そうやつてると御曹司つて感じよねえ」
そう呟いた私の声を、ヤツは聞き取つたようだ。穂高は爽やかな御曹司スマイルで、
私を見下ろし、嫌みつたらしく言つた。

「社長の息子という肩書きらしく振る舞つてただけだ。三森にもそうしようか？」
「今更何言つてるの」

私の目から見ると、穂高の『いかにも御曹司』つて笑顔は、胡散臭くてしようがない
のよね。

「御曹司だろうが、なんだろうが、私には関係ないわよ。穂高は穂高だから」
(そうよ、いつか絶対こいつを乗り越えてやるんだから!)

そう思いを込めて、きつと睨み付けると、穂高はふぬけた顔をしていた——と思つた
けれど、すぐにいつもの黒い笑みに戻る。

「三森が俺を超えるのを楽しみにしてる」

ふん! と視線を逸らした先に、ロビー奥のフリースペースがあつた。観葉植物とソ
ファが設置されたその場所は、受賞したデザイン画が飾られていて——私にとつては聖
地のようなもの。

「ちょっと見てくる。少し待つてて」

つかつかと足早に歩き、誰もいないスペースに足を踏み入れる。白の壁のあちらこち

らに、額縁に入れられたデザイン画が飾られていた。私の目当ては、その一番奥にある。
かつんと足を止め、A3サイズの作品を見上げた。

「……」

それは、不思議な家だつた。青い海の見える丘の上。こんもりとした緑の丘の中腹に
ガラスの窓と白いドアが並んでる。斜面を利用して、半分地下になつている住宅な
のだ。

全体の外観図の横に飾られているのは、リビングや寝室のパース図。繊細な線で描か
れた緻密な画は、あの頃の私には作成できないレベルで……悔しいを通り越して凄いと
思つた。

そう、就職活動中にこのデザイン画を見て、私はここに入ろうと決意した。私が大学
生時代に落選した建築賞の大賞。一目で心奪われた作品が、ここにあるなんて! と信
じられない思いだつた。入社したら、絶対この作品のデザイナーと話がしたいと捜した
けれど、先輩からこの作品は社長の知り合いがデザインしたものだ、と聞かされた。
なんでもワケありの人らしく、社長が代理となつてチーム名でエントリーしたらしい。
大賞を取つた後、この作品はお礼としてその人から社長に贈られたのだそつだ。
今見ても、地下なのに何故か開放感を感じる色使いや、部屋の仕切りや置いてある家
具の一つ一つにセンスを感じる。リビングの壁の一面だけ差し色になつているのも、凄

くオシャレだと思う。

「やつぱり……凄いなあ」

思わずそう呟くと、後ろから低い声が聞こえてきた。

「三森は今でもこの作品が好きなのか?」

振り向くと、無表情の穂高がじっと私を見下ろしていた。ちょっとむつとした私は、

口を曲げながら答える。

「当然じゃない。発想は奇抜だけど、地下だから温度差が少なくて夏も冬も過ごしやすい空間になってるし、なんと言つてもワクワクする作品でしょ? こんなところに住めたら、毎日楽しいだらうなあつて思う」

「……」

「穂高は気に入らないみたいだけど」

そう、新人歓迎会の飲み会で、私がこのデザイン画を絶賛した時の穂高の顔は、今でも覚えている。さつきまでにこやかな表情を消して、何言つてるんだこいつ、みたいな目で睨んできた。そんな穂高をやり込めかけたけど、歓迎会という場の雰囲気を壊すこともできず、口を閉ざしたのだ。

「毎日楽しい……か」

穂高の口は、皮肉げに歪んでいた。彼の瞳は、私を見ているようで見ていらないように

思えた。

（何が気に入らないのか知らないけど、作品に失礼じゃない）

むすつとしながら、「さ、行くわよ」と穂高の横を通り過ぎる。穂高も黙つて私の隣に並ぶ。

そうして会社を出て、穂高がタクシーを拾うまで……私達の間に会話のかの字も存在しなかつた。

「ここが……」

私は、駅前のバスターミナルに面した古いビルを見上げた。一番高いビルは七階建てで、隣にも同じ高さのビルが並んでいる。その間に設置された渡り廊下は、横から見ると少し斜めになっていた。ビルのフロアの高さが微妙に違うみたいだ。

夕日に照らされたコンクリートの壁の色もところどころ墨のようになつていて。一階は薄汚れた緑のシャッターで閉ざされていて、その上のスーパーの看板跡が妙に白く残っていた。穂高がタブレットで資料を見ながら話す。

「元々一つのビルで開業していたのを、隣のビルを買い取つて、渡り廊下で繋げたらし

い。営業時も段差や階段の多い造りで、買い物かごを持つて移動するのが大変だと顧客

や元店員からの意見があつたそうだ」

「そうよね、無理矢理くつつけたのがわかる見た目だわ、これ。で、そのまた隣が映画館……こちらも随分古いわね」

「場所も微妙に良くないな。駅に直結していない上、駐車スペースも少ない。駅から歩いて移動するにも、その間に屋根がない。買い物には不便だろう」

雨の中、傘を差して買い物袋を手に提げて……つて面倒よね。駐車場の確保が難しいなら、せめて駅から濡れずに来られるようになないと。

（土地の広さからいって、地下駐車場はあまり広さが確保できないそうだし、ビル一棟を立体駐車場にするか、屋上を駐車場にするかにした方がいいかも）

ビルの谷間、渡り廊下の下の路地は、小さな飲食店が並んでいた——ようだけど、ほぼシャツターゲ下りで下りて、営業しているのは、一、二軒つてところか。斜めにずれた看板がそのままになつて、隣の古鳥が啼いているのは間違いない。

（だけど、スーパーが最盛期だった頃は、きっとこの辺りも人が沢山通っていたはず）鶏の焼ける香ばしい匂いが漂ってきた。ぶわっと私の目の前に、在りし日のセビリア色の風景が広がる。ちょっと一杯引っかけるサラリーマンや、焼き鳥を包んでもらう親子連れの足音まで聞こえてくる気がした。

かつてここに溢れていた人の笑顔。それを取り戻したい。

「ここだつたら、欧風マーケットの雰囲気で屋台を出して……ああ、レトロな昭和風でもいいかも。ちょっとした隠れ家の雰囲気を出して」

ターゲットはどうしよう。若者向け？ それとも……

くすり、と右隣から小さな笑い声がした。

「何よ？」

じろりと穂高を見上げると、彼は「すまん、三森らしいと思つて」と笑つた。

「見えてるんだろ、お前には。ここで楽しい時間を過ごしていた、過去の人の姿が。そして、ここに未来の姿も」

（！）

私を見つめる穂高の顔は、いつも私に突つかかつてきついた時のものではない。穂やかで、瞳の色は優しくて、口元もふわりと綻んでいて。まるで——恋人に微笑んでいるような甘い雰囲気まで漂ってきた。

（うくっ！）

「そ、そ、う、よ。いくつかアイデアが浮かんだわ」

「こほんと咳払いをしつつ、私は穂高から視線を逸らしてスマホをバッグから取り出した。

「パシャパシャと写真を撮つていると、すつと頭の上に影が落ちた。スマホのディスプレイのど真ん中にヤツが映つている。

「穂高。邪魔なんだけど」

私が口をへの字に曲げると、大きな手がひょいと私のスマホを奪つた。

「ちよつと穂高っ!?」

右手を伸ばしてスマホを取り返そうとしたその時、奴の左手がするつと私の身体を引き寄せる。穂高が顔を寄せてきて、爽やかな香りが鼻腔をくすぐつた。

「っ!?」

パシャリ、と機械音が鳴る。慌てて穂高の胸板に手を当てて離れた私に、穂高は満足げな表情を見せた。

「ほら、記念撮影」

ほんと私の右手にスマホが渡される。画面を見ると、灰色のビルをバックに、穂高と私が顔を寄せ合つて写つている画像が表示されていた。

「……何、この満面の笑みは」

穂高はさつきみたいに、嬉しそうに笑つている。一方の私は、穂高の方を向き、口を尖らせて何か文句を言つている感が凄い顔だ。

「俺達同期だけど、一人一緒の写真つてないだろ。その画像は待ち受けにでも使ってくれ」

「やだ。私の待ち受けは、愛しいベルちゃんに決まってるのよ！」

（ベルちゃんと穂高なんて、比べる対象にさえならないわよ！）

ちなみにベルちゃんは、実家にいる白猫だ。ふつくら気味で、短い毛がもふもふして

いて、実家に帰る度に肉球吸いをするのがお約束。

「じゃあ、俺宛てに画像送つてくれ。記念に保存しておく」

「もちろん」

につりこ笑つた穂高の顔が、傾きかけた陽の光を浴びている。

「俺達が初ペアを組んだ記念。三森との仕事は——きっと良いものになる。受注して記事になつた時に使えるだろ？」

受注してつて、さらりと言つたな、こいつは。もちろん私だつて、コンペに出る限りは受注目指してベストを尽くすつもりだ。でも穂高は、目指してるじやなくて受注する

と言っている。

(こういうところが敵わないって思うのよね、悔しいけれど)

私はそこまでの自信が持てない。だから穂高に追いつけ追い越せと懸命に努力しているけれど、穂高はすいすい先に行ってしまう。

……QRコードが表示されたスマホの画面が目の前に。どうやら穂高は私からの送信を待つてあるらしい。はいはい、わかりましたよと、コードを読み取った後、穂高宛てに画像をぱちっと送信。隣でピロン、と電子音が鳴った。

ささつとスマホをいじった穂高は、目を伏せ、画面を見ながら口端を上げた。その表情に、心臓がまた煩くなる。

(なんだろ、この動悸は……)

私がよくわからない感情に捉われている間に、ヤツはすっかりいつもの穂高に戻った。私は穂高から視線を外して、また路地の方を見る。赤い暖簾が下りた屋台から、さつきの匂いがする。そういうえば小腹が空いたな。

「ねえ、あそこの屋台美味しそうじゃない? 私ちょっと買って——」

「ああ、そうだな。ついでに食べながら話を聞くのもいいだろ?」

「はあ?」

穂高の声が私の声を遮る。ぽかんと口を開けた私に、穂高が不思議そうな顔になつた。

「え? 路地裏の屋台だよ? 穂高がそこで食べるの?」

そう聞くと、穂高の眉間に皺が寄つた。

「……三森。お前俺のこと、なんだと思ってるんだ」

私の眉間にも皺が寄る。

「うちの会社の御曹司でお金持ち。いつもは、一流ホテルのレストランで夕ご飯食べてんじゃないの?」

だつて穂高って、派手派手しいというより品が良いというか。どう見ても、屋台で焼き鳥を食べている姿が想像できない。

はああ、と穂高が深い溜息をつく。

「お前が嫌みで言つてゐるんじゃないつていうのはわかるが」

「事実でしょ」

「……俺だって学生時分は、三森と似たような環境で過ごしたんだ。ほら、行くぞ」「ちょっと!」

がしつと右手首を掴まれた私は、ずるずる穂高に引き摺られて屋台に近付く。醤油の焦げた香りが濃くなつた。くうつ、お腹を刺激してくる!

「へい、らっしゃい! こんな若いカップルが来るとは、珍しいねえ」

屋台の中から、お父さんと同じ年ぐらいのおじさんが声をかけてきた。屋台に備え付

けられた折りたたみのテーブルの前に、穂高と私が並んで座る。目の前で、炭焼きの焼き鳥からじゅわっと肉汁が落ちた。

「ももと皮、ほんじり……あ、軟骨の唐揚げも。穂高はどうする？」

「三森と同じでいい。おじさん、アルコールはある？」

ちらと腕時計を見ると、もう終業後だった。だつたらしいか。

「ビールかノンアルになるけど、どちらにします？」

「じゃあ、私はノンアルで」

穂高はビールを頼んだ。コップをカチンと合わせて乾杯し、ぐぐつと飲む。最近のノンアルは結構風味が良いなあ。そういうしているうちに、目の前に良い匂いがする焼き鳥が並べられる。

「あ、もも美味しい！ 焼き加減もちょうどいいし、肉汁もじゅわっと。タレも美味しい！」

「そう言うと、おじさんは嬉しそうに顔を綻ばせた。

「あ、じゃあそれ追加で」

もぐもぐと食べる私の左隣で、穂高も美味しいように焼き鳥を食べ、ビールを飲んでいる。あーこの味、ビールに合うんだろうなあ……と思つていたら、穂高がこちらを向

いた。

「三森、アルコール結構いけるんじやなかつたのか？」

「え？」

私は目を瞬いた。穂高の顔は至極真面目だ。

「確かに、新入社員の頃、そう言つてたのを聞いたんだが」

会社の飲み会ではアルコールを飲んでなかつたはずだけど……そんなことも言つたかなあ。首を傾げながら、私はノンアルを一口飲み、目を伏せた。

「ああ、うん。飲めないわけじゃないけど……一度お酒で失敗したから」

——そう、思い出すのも恥ずかしい、あの黒歴史。割り切りが早い私でも、完全に吹つ切るのに数年はかかったわよ。今だつて思い出すと赤面して悶えてしまいそうになる。

「交流会みたいなのに参加して飲みすぎて、記憶を飛ばしちゃつたの。朝起きたら、全く何も覚えてなくて、怖くてパニックになつて……それで、あんな思いをするんだつたら、もう飲まないつて決めたの」

あの場には百名以上参加していたし、出席者全員の顔も名前も当然わからない。結局、誰と一夜を過ごしたのかは不明のままだつた。

（幸い身体に暴力の痕はなかつたし、合意の上……だつたと思つたい）

いかんいかん、思い出すな。ふるふると首を横に振った私は、『ぶぶとノンアルを一気飲みし、誤魔化そうとした。

「……そう、か。覚えてなかつた……のか」

「あ、おじさん、ノンアル追加で！」
空になつたコップをだん！ とおじさんの目の前に置いた私は、穂高がほそつと呟いた言葉など、耳に入つていなかつた。

「うーん……」

ワンルームのベッドに仰向けで寝転がつた私は、スマホの画面を見つめていた。そこに表示されているのは、穂高からのメッセージだ。

——今日はお疲れ様。明日も打ち合わせあるから、よろしく。お休み『メッセージアプリや会社の電話だけじゃ繋がらないこともあるだろ？』
……そう言われて、プライベートの電話番号も交換した、けど。

「……」

(穂高つてマメだよね……さすがモテるはずだわ)

焼き鳥屋からの帰りも、さつさとタクシーを捕まえて、私の家まで送つてくれた。うちはセキュリティ付きドアだから中には入れないけれど、ガラスのドアが閉まるまで、

ドアの前に立つて見送つてくれていたのだ。

茶色の前髪とトレーンチコートの裾が夜風に揺れていた。ガラス越しに見る穂高は、背

が高くて、脚が長くて……どこのファッショングラフのモデルかと思うぐらい、格好良かつた。

穂高と並んで歩いていると、とにかく女性陣の目を惹く。穂高の方を見て頬を赤らめ、うつとりした女性が、隣の私に視線を移した途端、は？ みたいな表情になるのだ。

まあ、私はいくらお化粧しても童顔だし、背は低めだし、着ているものも動きやすいパンツスタイル（もちろん量販店で購入）ばつかりだし、いかにもお金持ちオーラを出している穂高と並ぶと、落差が激しいんだろう。

だからきっと、彼女の一人や二人いるのかと思ひきや。

「意外に女つ気がないというか」

誰に対しても（特に女性社員には）ジエントルマンな穂高だが、なんというか一步引いているみたいな感じを受けるのだ。

……セレブだから、騙されないようガードが堅いんだろうか。

「……そういえば総務の高井さんが、穂高をモデルに薄い本作つてるって、冬子から聞いたつけ」

叶わない恋に身を焦がす社長令息の話らしいけど、読んだ冬子によると人物描写がもう穂高なのだと。私は読んだことがないけど、その本は社内では結構出回ってるそうで……ヤツは知っているのだろうか。

（イケメンは苦勞も多いんだろうなあ……）

少しだけ、穂高に同情した私だつた。

2 俺は香苗を愛してる

本日の私の格好は、襟ぐりが大きく開いた黄色のサマーニットにブラウンのパンツ。

冬子に『ひまわりよね』と言われたが、気にしない。

「さて、穂高がいない間にリサーチ結果を取りまとめてつと」たたたとキーボードを打つ。狭い会議室には私と六人掛けの椅子と長机、山積みの資料にノートパソコン、キャスター付きモニターしかない。

コンペに出るまでの作業場所として、穂高がこの会議室を長期予約したのだ。もつと他のコンペに出るチームも皆同じように会議室を借りているらしいので、遠慮なく業務のない時間はここに籠ることができた。正直、自分の机では紙資料が溢れてしまう

ので、とても助かっている。

「今回のコンセプト案……どれに決めるか……」

バサバサと、走り書きのデザイン画を見ながら考える。ノスタルジールートで行くか、近未来的デザインにするか、ベーシックなデザインで高級感を出すか。一人ではなかなか決められない。

「これは穂高が戻つてからにしようつと」

今日、穂高は社長と共に外出だ。穂高がデザインした事務所が大好評で、クライアントから追加依頼があつたらしい。

「大企業のサテライトオフィスのデザインかあ……」

穂高と二人であーでもない、こーでもないと言い合つて作ったスライド資料をパソコン画面に映しながら、私はぶつぶつと独り言を呟いた。

（実績で負けてるのは悔しいけど……穂高と仕事をするの、結構楽しいよね……）

（ほぼ喧嘩で言い合うこともあれば、そうそうだよね！ と激しく同意する場合

もある。）

なんというか……刺激的なのだ。あつという間に時間が経つて、夕ご飯を食べ損ねたことまである。穂高が何か奢るというのを断り、コンビニおにぎりで済ましたこともあつたつけ。

ぐう。食べ物について考えたら、不覚にもお腹が鳴つた。壁掛け時計を見ると、もう午後二時を回つてゐる。作業をしていたら、時間の感覚がなくなるのがだめだよね。

「コンビニに買いに行こう」

このビルの一階にあるコンビニは結構大きくて、お弁当類が充実している。よし、今日はがつつき系のお弁当にしよう。唐揚げ丼かとんかつ定食か。さつと椅子を引いて立ち上がり、お財布の入つたポーチを左手に取つたのとほぼ同時に、真正面のドアがノックされた。

「あれ、穂高もう帰つてきた、の……」

ドアがこちら側に開き、するつと会議室に入つてきたのは——穂高とは似ても似つかない男だった。

軽くウエーブがかつた黒髪に、グレーのストライプのスーツを着た垂れ目がちの彼は、ざつと会議室の中を見回している。今にも崩れそうな山積み資料に、散乱した走り書きメモ用紙を見た途端、やれやれと肩を竦めた。

「三森。お前の作業場所、相変わらず汚いな」

「飯塚さん」

（げ、なんでこの人がここに来るのよ!）

飯塚覚。十歳上の、同じ課にいる建築デザイナーだ。大学時代にフランスに留学して、

あちらの建築様式を学び、かつて大仕事に抜擢されたんだかなんだかという経歴の持ち主だけど……なんというか。

（げげつ、しかも藤原さんと井上さん（取り巻きダブル）まで一緒に！）

飯塚さんの後ろに控えている二人組は、飯塚さんと同類項で括られる先輩達。いつも穂高への愚痴をまき散らしている輩だ。飯塚さんと違つて、こちらの二人は目立つた経験もない人達だけだ。

「お前、穂高と組むなんて無謀だな。あいつとお前じや、デザインの方向性が全く違うだろ」

（いちいち嫌みつたらいいつたら。特に——）

飯塚さんの薄い唇が、薄ら笑いを浮かべる。

「もつとも今回のコンペは俺達も合わせて三チーム参加することになつてゐる。お前らが足を引っ張り合うのは大歓迎だ」

「そうですよね、俺達も助かります」

もみ手でもしそうな勢いで藤原さんが言う。

へこへこ言いなりになつてゐんじゃないわよ。ただでさえ空腹なのに、胸がムカムカしてきて気分が悪い。

「なんで足を引っ張り合うんですか。コンペに向かつて共同作業中ですよ、私と穂

高は」

飯塚さんの目が冷たく光る。

「はつ、穂高が他人——しかも、いつも喧嘩ばかりのお前と共同作業なんて、笑えるな。まあ、いい加減あいつも化けの皮が剥^はがれる頃だろ。穂高は今まで恵まれすぎてたからな」

(これだよ、これ)

何故だか知らないけれど、飯塚さんはずっと穂高を目の敵^{かたき}にしている。穂高はそれをわかっているのか、彼とは距離を置いて事務的な態度を取っていた。

「確かに穂高は社長の息子ですけど、ただそれだけじゃないですか」

「それだけ? それだけで済むわけないだろうが。大きなコンペには必ずと言つて良いほどあいつの名前が候補に挙がる。あいつの実績も、社長と懇意^{こんい}にしている相手先なら、

当たり前のように評価を付けるだろうよ」

その通りとばかりに領く取り巻き二人にも腹が立つ。

(何言つてるのでよ!)

私はキッと飯塚さんを睨^{にら}み付けた。

「穂高の実力は本物です。社長の七光りなんて言われますけど、それだけであの評判を

取ることなんて不可能です」

すつと細められた彼の目が、まるで蛇の瞳のように見える。

「へえ、お前は穂高を嫌っていると思っていたが、違うようだな」

「好き嫌いと評価は別です」

私と穂高は喧嘩ばかりの同期^{けんか}という関係。でも、だからって、穂高のやつてきしたこと——彼の作品^{ぶ晶}を貶^{けな}すなんて、許せない。

私は知っている。遅くまで残業して、一心不乱にデザインをしている穂高を。才能豊かなデザイナーではあるけど、努力なしで今までの成果を出したんじゃないことぐらい、私にだつてわかる。

(あいつの作品は……いつだつて凄くて、絶対負けるもんかと奮闘してきた目標なんだから! いい加減なこと言うんじゃないわよ!)

「成程。三森は穂高に懐柔^{かいじゅう}されてるらしいな。まあ、お前は単純思考だからな、穂高も陥^{おち}れやすいんだろうよ」

人のことを単純思考だなんて、本当に他人をディスるの好きよね、この人は。見た目はまあまあイケメンの部類に入っているかもしけないけど、人を蔑^{さげす}むような態度が感じ悪い。

「どうして穂高が私を陥れるんですか。おかしいでしょ」

立ち読みサンプル はここまで

50

チームを組んでいる相手を陥れて、何になる。自分も火傷するだけだ。

「ははつ……三森、お前本当に何も知らないんだな。社内の噂も穂高のことも。さすが

「はあ～？ 滅筋？」

頭が悪くて社内で拳を振り回してやがる女扱いなわけ!? 確かに今、握り締めた私の右拳はふるふる震えているけど、まだ殴つてもいいのに!? どうせそう言うなら、せめて殴つてからにしなさいよ！

「お前も建築デザイナーの端くれなら、山形有美子の名は聞いたことあるだろう」
急に変わった話題に、私は眉を顰めた。

「それは……はい」

山形有美子。HODAKA DESIGN COMPANY のライバル会社、Yamagata Design Studio の社長令嬢にしてデザイナー。学生の頃から活躍していた彼女は、数多くのデザイン賞を受賞した、美人建築デザイナーとして有名だ。私だって、同じ女性としてデザイン業界で活躍している彼女のことを尊敬する一人。雑誌で見た彼女は、柔らかな栗色の髪を肩になびかせ、ライトブルーのブラウスを着た、いかにも上品なお嬢様

という感じだった。

にんまりと飯塚さんがまた嗤う。
わら

「穂高が彼女と通じ合つてゐる……そう言つても、お前は穂高に協力するのか?」

私は目を大きく見開き、ぽかんと口を開けた。
(通じ合つてゐる……つて)

あまりにも突拍子もない発言に、言葉が出ない。間抜けな顔、と井上さんがせせら笑うが、それどころではない。

「穂高が山形有美子にコンペの情報を流すかもしれないってことだ。必死に穂高に協力しても、その戻果は山形に奪つられるなんて、かつて、どうな^レど、三森^ル」

「なつ、何言つてるんですか、飯塚さん！ 穂高がそんなことするわけないでしょ
う！」

「なあ、と後ろに同意を取る飯塚さんに、私は声を荒らげた。
しても、その成果は山形に奪われるなんて、かわいそんが奴だな。
三森も」

！」
デザインの流出。情報漏洩。デザイナーとして絶対にやつてはいけないことだ。それ
くらい、穂高だつてわかっているはず。

「山形有美子と穂高は、かつて恋人同士だったって聞いたことないのか？」 それも穂高
これだから知らない奴は、と飯塚さんが呆れた様子で溜息をつく。